

## 【一般講演2】 第7席

## 「『甲乙經』卷之三における刺入量について」

東京 噴峻年思子

刺鍼の量的基準をどの様に設定するかは、臨床に直結した重要な問題であるが、現在の臨床では専ら個人の経験に任されている。施術の対象となる病者の病態は個別的でありそれぞれ相応の施術量が必要であることは当然であるが、一方、鍼灸が主観的な思い込みを越えた医学としてある以上、なにがしかの基準がなくてはならない。そのことを考える上で、中国の古い時代に刺入量という問題がどのように扱われていたかを調べてみることは重要であると思う。

古代中国医学の諸文献には刺入の深さなどの記述が散見する。しかし、それらは統一性を欠いた個別的な記載であって、この問題を総体として考えるための資料として十分ではない。これに対して『甲乙經』卷之三では伝統的に使用されている三百五十余穴の各穴ごとに刺入深度及び留鍼の呼吸数が整然とした体例で示されており、此の問題を体系的に考察していく上での最良の資料となっている。そこでこれらを整理要約し、その傾向性を探ることにより、古代中国における刺鍼の施術量について考察を行うこととする。